沼津工業高等専門学校研究報告
第54号，2020年1月

「火筒のひびき遠ざかる」にみる田辺聖子の恋愛観―老い・戦争・不倫の香り―

小林美恵子

Hozutsu－No-Hibiki-Toozakaru　by　TANABE　Seiko，Her View of Love
―　Old Age，War, and Affair　―

KOBAYASHI　Mieko

Key Words:　Old Age，War，Affair，War Song

１．はじめに

「火筒のひびき遠ざかる」は 1991(平成 3)年 3 月 15 日、『週刊小説』第 20 巻 6 号に発表された恋愛短篇小説である。執筆時期はバブルの絶頂期、昭和が終わり、平成という新たな時代に入って間もなくの頃と思われる。中心人物は、60 歳を過ぎ、すでに子供も独立した初老の男性・松永、そして戦後に結婚の機会を逸し、「ハイミス」として働き続けてきた女性・川越昭子である。

タイトルの「火筒のひびき遠ざかる」は、明治期に作られた婦人従軍歌の曲名である。発表当時の現役世代にはすでに知るものは誰もいないという歌曲であろう。平成の幕開け期、豊かさに日本中が酔いしれる中、二人に軍歌を歌わせて、田辺は何を語ろうとするのか。

物語は、田辺が得意とする、平凡なサラリーマン・松永のコミカルな日常スケッチに始まる。が、諧謔に満ちた展開の中には、家庭では満たされない心の渇き、時代の風潮への違和感や怒り、うなずき合える相手のいない孤独感といったものが漂う。日本が世界的な経済繁栄を誇る中、庶民の暮らしには何が起こっていたのだろう。そして、ほぼ同い年の昭子の人生に光を当てれば、戦争によって望んだ生き方を阻まれた女性たちが、今なおその延長線上を孤独に生きているという現実に突き当たらなければならなくなる。

多感な思春期に戦時下を過ごした田辺は、生涯戦争への意識を忘れることはなかった。本稿では、田辺文学に特有の「軽み」や「ユーモア」という魅力の前に読み落とされがちな深いメッセージに目を凝らしてみたい。この作品にも、平成の世にあってなお戦争を今現在の問題として見つめ続ける田辺の深いメッセージがくみ上げられるのではないか。

＊教養科 Division　of Liveral Arts

２．　平成の世への違和感

舞台は大阪近郊、今年 63 歳になる松永は 3 年前に大手の車両会社を定年退職し、その後関連会社に 2 年勤め、現在は知り合いのプラスチック加工業の会社に再就職し、三度目のサラリーマン生活を送っている。作品内時間は執筆時間と重なるようであるから、松永は 1930(昭和 5)年ごろの生まれ、その後 1955(昭和 30)年ごろ、すなわち高度経済成長期(1955～1973)と歩を揃えるようにサラリーマンとして世に出たようだ。

この世代の男性たちは、専業主婦の妻と 2，3 人の子供を持つ核家族生活者が多く†1、自身は「企業戦士」として、まさに 24 時間を会社に捧げて過ごしてきた人々である。彼らは一世代前の男たちのように、退職と同時に会社員生活に別れを告げ、ゆっくりと隠居生活を送ることはできなくなった。1986(昭和 61)年の「高齢者等の雇用の安定等に関する法律(高年齢者雇用安定法)」によって 60 歳定年が努力義務化され、さらに 1990(平成 2)年には定年後再雇用が努力義務化とされ、これをもってサラリーマンたちは、事実上定年を迎えたといっても隠居生活はできないこととなったのである。作品内時間はおそらくこの頃に重なり、松永は現役時代も働きづめ、定年後もさらに働きづめねばならない運命を生きているのだった。現在の職場は知り合いの会社ということだが、それだけに気も遣い、少人数のために働きも「えらい」。「責任感が強くまじめ」と説明される松永はまさに「ツツいっぱい」の頑張りで仕事に励んでいる。

彼は、この年齢に差し掛かって、無趣味である

†1　国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集(2006 年版)』によれば、1953～57 年の妻一人に対する出生児童割合は、無子 4.1%、1 人 9.1%、2 人 52.9%、3 人 28・4%、4 人以上 4.0%で、平均出生児数は 2.2 人となっている。

ことを欠点として意識させられるようになった。定年までの現役サラリーマン時代には、趣味など持たず、仕事に没頭することが奨励され、疑いもなくそれに従って生きてきたのに、もはや別の生き方に変えようもない年齢に差し掛かってはじめて、今度は趣味を持つことを求められ、持てないことが欠陥のごとく周囲からの批判の種にされる。松永は「趣味」の価値は理解できるものの、自分がどのような「趣味」を持てばよいのか皆目見当がつかない。

一方、彼と長年連れ添った妻は、たくさんの趣味を持ち、日々を輝かせて過ごしている。テニスにコーラス、そして「娘たちの家庭管理、ならびに孫の人生設計」が彼女の「趣味」であり、夫のことは「どこへ行っても何を見てもつまらなさそう、何を話しかけても『ふうん』なんだもの」という理由で、人生終盤を共に歩む伴侶としては、除外している節がある。

松永夫婦には娘が三人おり、すでに全員結婚して家を出た。が、三人とも母親の援助を宛てにして私鉄で一、二駅の近隣に住み、母である松永の妻も、嬉々として娘たちの家庭を順に回って世話を焼く。松永の苦言にも、「だって親子やないの。たすけ合うの、あたりまえでしょっ」と聞く耳を持たない。

「親と子の関係に何かが起こっている」「(諸悪の根源は、現代の母親じゃっ)」と松永は強い違和感を腹立ちに発展させているが、それは自分の妻だけの問題ではなく、世間みな押しなべて「親子はどこもかしこも、癒着・膠着な」のであった。旅行、スポーツ、音楽、俳句、何らかの「趣味」に所属して、精力的に活動する。大事な子供の世話をとことん見て、愛情を惜しみなく注ぎ込む。いずれも、松永にはどうしても馴染めない。

このあたりは、田辺自身のバブル期社会への批判が読み取れるところであろう。追い立てられるように何かをしなければと「趣味」を持とうとすることは、本当の趣味なのか。消費社会に踊らされているだけで、周囲に乗り遅れないようにと、自分もどこかに所属しようとしているだけではないのか。家族の形にしても、いつまでも子が親を頼り、親が子の面倒を見続ける関係は、いびつと言うべきではないのか。それはかつての大家族や二世代、三世代同居とは似て非なるものであり、親離れ子離れの失敗を露呈するものに過ぎないのではないか。

しかし、田辺は松永に、自身の本音を表立って妻にぶつけることはさせない。松永は「声を荒げ、もめるのがいや」だからだ。そして、妻が「言い合いをしたくないタイプの人間」だからだ。結果的に、不満は内心の声となり、そこでは(そこまで世話役こと、あるかっ)と語尾に「っ」がつく激しさがあるが、発言される言葉は「ええ加減にしとけよ、みなもう、ええトシやねんから…」と「…」で終わるやんわりしたものにならざるを得ない。

「黙々と会社へ通い、黙々と巣へ帰ってくる松永」のことを、「妻は、殺風景で話の分からぬ、いよいよ偏屈になった、うっとうしいおっさん、と思っているようである」。松永も妻も、ここまで冷え込んだ関係に至りながら、なぜ夫婦関係を解消しないのか。

松永夫妻のように価値観がかけ離れていても、夫婦として何十年もの月日を送ることは不可能ではない。「バツイチ」という言葉が登場したのが 1992 年、それまでは離婚歴というものは否定的に受け止められ、あれば隠すべきことと認識され、できれば回避しようとするのが一般的だった。よほど大きな障害がない限り、惰性や習慣によって共住みの形態を維持しようとする人々が存在するのは、令和に入った現在でも珍しいことではない。

が、離婚しないことと夫婦が愛情を抱き合っていることとはイコールではない。妻は、松永を、現金収入を得る働き手としては頼りにし、松永も不満は多々あれど、ほかに頼る当てもないために毎日妻の住む家へと帰っていく。ほかに楽しみを豊かに持つ妻はこのままの状態がどれだけ続いてもよかろう。が、すでに人生の終盤を意識し始めた松永の心には、常に隙間風が吹いているような毎日は辛すぎる。その風穴をふさぐような何かが見つかれば、彼の心がそちらに向いてしまうのは当然の成り行きと言える。

松永夫妻には、昭和を通してスタンダードな位置を占めてきた夫婦像、すなわち家事育児は妻、現金収入獲得は夫、という性別役割分業型夫婦の、ひずみのようなものが反映されていよう。妻と娘三人との強い団結と、そこから疎外された松永の対比は、松永も妻の家庭内の奮闘を全く知らないし、関わってもこなかったことを物語り、昭和のモーレツ社員として過ごした松永の苦労が妻には理解されようもないことを浮き彫りにする。

３．　同志との出会い

この作品内には、1991 年当時の一般的な恋愛観が随所に反映されている。たとえば、松永と昭子の出会いの舞台となるミナミの炉ばた焼き屋で、店内の男女の品定めをするまだ若いＯＬたちの会話にもそれは現れる。彼女たちの視線を集めているのは、少し離れた「向こうの席」の一組のカップルである。

> 「(前略)中高年の男女が二人でぺちゃくちゃしゃべってたら、それは恋人や、と誰かの本に書いたァったわ。その年ぐらいの夫婦なら、しゃべることは何もないんやて」／「ふーん。あのトシで恋人か。気色悪う」／「年甲斐もない。いやらし」／「そ。醜悪。不潔、怪っ体」／「媚びてる。あのおばさん。見て」

未婚の若い女性たちの中には、すでに「夫婦」という関係は会話もない、干からびたものと受け止められており、彼女たちは中年の男女が恋人を持つことは気色悪く、いやらしく、醜悪で、不潔なことと思い込んでいる。むろん、若い世代ゆえの、世間知らずな幼さが言わせている言葉ではあろうが、世間に蔓延した概念を受け売りしていることがうかがえる。これから結婚し、家庭を持つ彼女たちが婚外恋愛に拒否感を抱くことは望ましいが、彼女たちはいわば年齢で恋愛の資格をはかり、中高年へのハラスメントともいうべき蔑みの意識を持っている。恋愛が若い時のものだけと思っている彼女たちは、長い生涯をどう過ごすつもりなのであろうか。、夫婦間であっても、一定の年齢を過ぎたら、楽しく語らうことさえ「気色悪」いと言い出しかねない。

一人飲みながら傍らの席でそれを聞き、口さがないギャルの下品さに閉口する松永も、男女の関係について抱くイメージはこれと大差ない。

> 「あのトシで」とギャルらはいうが、松永からみることろ、まだ五十なかばである。じっくりおちついた男に、丸く肩の太った女、酒をついだり、つがれたりしつつ、何かむつまじげにしゃべり合い、うなずく。時に笑う。たしかに、あの年齢の夫婦なら、あれほど、しゃべり、笑うことはあるまい。／(中年の恋人…ねえ)／考えられまへん、と思いつつ、松永は焼き鳥の串を横咥えする。

自身も「おじさん」である松永は、知らずにギャルたちの攻撃の対象にされている「おばさん」やその相手の男にも、否定的な感情は持たない。ただ、「睦まじげにしゃべり合い、うなずく。時に笑う」などということが自分と妻にはあり得ないことゆえ、この男女にしても夫婦であろうという発想が持ちえないのであった。彼もまた、夫婦というものは通い合うものの失われた、単なる家族構成員同士以外の何ものでもない、というあきらめの固定観念を抱いている。

が、一方で 80～90 年代の日本の社会には、婚外恋愛はひそかに、深く浸透していた。NHK が総合テレビで「中高年の離婚」を取り上げたのが 1983(昭和 58)年、TBS ドラマ「金曜日の妻たちへ」の放映は 1983 年から 85(同 60)年、歌手テレサテンが「愛人」をヒットさせたのは 1985 年、「家庭内離婚」が新語流行語大賞を受賞したのが 1986(同 61)年である。バブル期の軽く華やいだ空気、女性の社会進出、恋愛観の変化など、理由は様々あろうが、日本の家族に大きな変化の予兆が現れ始めていた時期を作品はタイムリーに捉えている。

一方、松永を挟んでギャルとは反対側の席にいた昭子は、同じ男女に対し、違ったまなざしを向けていた。

> 「あのお二人、ご夫婦や、思いますわ…」／(中略)「分りますわ。どことなし、雰囲気で…」(中略)／女は静かに松永にささやく。／「息子さんがお迎えに。幸せなご夫婦ね」／「やっぱり、お向いは夫婦でしたな。おたくの観察力は鋭い」／と松永はいい、自分の徳利の酒を女についでやる。／(中略)「私、独りもので、仲の良えご夫婦みたら、うらやましいよって、しぜんに眼力ができましてん。」

ギャルたちと松永の見立てでは不倫の男女と見えた二人は、結局夫婦連れであった。昭子だけがそれを見破る眼を持っていたことになる。

未婚の若者にも結婚生活を維持することの難しさは不可避のことのように受け止められ、その結果、大人の恋というものは、恋愛感情を傾ける相手を家庭外にひそかに見つけ、一時的な恋愛を楽

しんではまたそれを繰り返す、というイメージで語られることになる。そのようなことができるのは女好きのするマスクや会話の能力を持つ男性のみに起こること、とあきらめている松永が「考えられまへん」と洩らすのも無理はない。経験がないために、他者のケースを推し量る想像力も持ちえないのだろう。

しかし、経験不足ゆえに円満な夫婦像を推し量れないというなら、昭子はどうか。彼女の視線はあくまで温かく、「仲の良えご夫婦」を見ると「うらやましい」ために自然と「眼力」ができたという。自身が 64 歳の今まで独身で過ごし、既婚者を「うらやまし」く思うなら、卑屈な感情を抱きかねないところであるが、昭子にそれはない。

おそらく、自分に夫がいたらどのようにでも大切にしたい、という思いが、見知らぬ男女を眺める中に自分を重ねる習慣を作っているのだろう。女性の些細な表情やしぐさ、視線などから、その相手への思いのほどや親しさの加減、関係の長さや深さ、互いの信頼度などを推し量り、ひと時その男女の中に自分を紛れ込ませ、つかの間当事者としての自分を擬似体験するロマンチックな戯れを楽しんできたのかもしれない。

昭子の伴侶になるはずだった、見も知らぬ青年は、いずこへか出征し、帰らぬ人となってしまったのだろうか。菅聡子は、このような女性たちのことを「戦争独身女性」とよび、戦争被害者として明確に認識されるべきことを提言している(「〈女手の反逆者〉田辺聖子論」『田辺聖子全集』別巻 1 所収、集英社、2006・8)。誰を責めるわけにもいかず、また、自身が望んだわけでもなく、孤独な生涯を強いられ、伴侶を持てないまま晩年を迎えた女性はどれだけの数に上ったろうか。その一方で、幸せにも伴侶を得られたカップルたちは、松永夫妻のように、相手への関心は生じる気配もなく、ぎりぎり家族としての体を保っているのみである。

「戦争独身女性」について説明するのに、「トラックいっぱいの女性に男性一人」という比率を示して戦後の結婚難が語られることは多いが、では、パートナーを持てなかったたくさんの〈あぶれた〉女性たちは、その後の人生をどう生きてきたのか。

昭和という時代は、アウトローに過酷な冷たさを見せる時代であった。相手がいないという状況にあってさえ、昭和 30 年代は「主婦でなければ女にあらず」という風潮が蔓延していた。女性社員に結婚退職の定めを設けていた「住友セメント事件」(1966)、女性社員の定年を 30 歳と定めていた「東急機関工事件」(1969)などの存在がそれをよく物語る。「戦争独身女性」の生きにくさはどれだけのものであったろう。その答えの一つが、昭子の生きた 64 年間である。

4． 平成の中の昭和

昭子は名前が物語るように昭和の初期の生まれ、松永とは同じ市内の同級生とわかって、いっそう二人は意気投合する。が、松永を引きつけた昭子の魅力は、それだけではない。おそらくは昭子が独身で、ここまで自力で働いて生きてきた経験が、同じような年回りの淋しそうな男性と、相通じ合う何かを投げかけさせたということであろうか。

妻には想像さえつきかねる職場での苦労の数々を、いちいち説明しないでも昭子には理解できる。松永のような男たちとともに社会の最前線で働いてきたからである。

田辺は不倫を提唱するわけでは決してないが、家庭内に愛情の対象を見出せなくなった男性と、戦争の犠牲となって孤独を強いられた女性の間に、互いをいたわり合う交流が生じることを、ごく自然なこととして描き出す。単純計算上は、彼女たちの人生にそれぞれ恋愛の花を咲かすためには、既婚男性たちが複数回恋愛をしなければならないことになり、婚外恋愛が必要になってくることもまた事実と言えよう。田辺が婚外恋愛を慎重に、しかし軽やかに、自然で美しいこととして描き続けるのは、「戦争独身女性」たちにささやかな幸せを捧げたい、という思いからではないだろうか。

昭子は父を早くに亡くし、滋賀県に母と兄があったが、年頃になると大阪に出て自活の道を選び、折々母に送金していた。母はそれを昭子の嫁入りの時に使うようにと貯めておいてくれたという。独身で母を見送った後、その貯金は見つけられなかったが、母が喜んでいてくれただけで満足であると昭子は明るい声で語った。

それを聞く松永はいじらしさで胸がいっぱいになり、また一方、松永が自分の身の上話を愚痴を織り交ぜて吐露すると、昭子は上手に松永の気を引き立ててやるのだった。彼女の言葉遣いの美しさ、観察眼の確かさに興味をひかれた松永は、いつしか心の内も外もなくくつろいで会話を楽しん

でいる自分に気づき、驚いてしまう。「妻や娘とはもとより、十三の飲み屋の姐ちゃんとも、ここまで「ぶっちゃけた」話を交わしたことはない」からだ。この程度の会話を誰ともすることなく長い家庭生活を送り、60 歳を過ぎた松永のことを考えると、その人生の淋しさに絶句させられるが、しかし彼はレアケースでも何でもない。これがバブル期壮年男性の標準に他ならないだろう。

妻や娘とはできない会話が、初対面の昭子とは容易にできるのは、同志愛のようなものが瞬時に共有されるからである。いちいち説明する必要などなく、とにかく同じ時代を、同じように、様々な困難を潜り抜けて今ここにある、という共通の思いが、無言のうちに相手へのいたわりの心を生ぜしめるのではないか。日々の松永を見てもうっとうしさしか覚えない妻には、この思いの共有ができないのは当然のことと言える。妻には妻の苦労があるが、妻と松永は価値観や家庭内での役割分担が離れすぎてしまい、最も近くで生きてきたにもかかわらず、相手を同志としてみる視点は持ちようがないのだった。

この後昭子と松永は、昭子の行きつけのバーへ向かった。そこは「どこかのビルの一階の通路」らしく、イタチが出たりするような路地を通らねばならない。畳屋町の通りへ出て、松永はビルの地階のバーに案内される。

「どことなく古ぼけて煤けており、それはレトロ趣味などというものではなさそうであった」「長い間の煙草の烟で天井も壁もすっかり、燻されている」と説明されるそのバーは、「他に客もなく、穴ぐらのような場所なので雨音も聞こえない。たぐいもなく、心が落ち着く」ところであり、「なんだか松永は、ずうっと前からこのバーを知っており、川越昭子は本当に幼な馴染みのような気がしてきた」。

この「イタチが出たりする」路地は、タイムトリップの通路であろうか、たどり着いたバーは、昭子と松永、そして昭子のなじみの婆さんママだけの昭和の空間である。ここで昭子はカラオケのマイクを取り上げ、しきりに恥じらった挙句、声高らかに「婦人従軍歌」(1894 年、加藤義清作詞／奥好義作曲)を歌い出す。

♫火筒のひびき　遠ざかる／跡には虫も　声立てず／吹き立つ風は　なまぐさく／くれない染めし　草の色…

四番までの歌詞を追っていくと、かなり生々しく日清戦争の悲惨が語られているが、美しい旋律のせいか、松永にはただただ懐かしく、「これこそ、むかしの日本のやさしいオナゴの姿やないか、という気がし、女性的なるものへのなつかしさ慕わしさに、不覚にも瞼があつくなってしまった」という。

昭子に誘われて、今度は松永が歌う。「せっかくやから、今夜は、ほんまに歌いたい歌、よそでは歌われへん歌にしますわ」とことわって彼が選んだのは、昭子の言う「あたしらの、よう歌うた歌」、「男の子の好きやった歌」、すなわちそれは「爆弾三勇士の歌」(1932 年、与謝野寛作詞／辻順治・大沼哲作曲)であった。

♫廟行鎮の敵の陣／我らの友隊／すでに攻む／折から凍る／如月の／二十二日の午前五時…

昭子と松永はすっかり子供に返り、昭和十年ごろの小学校での暮らしぶり、好みだった弁当のメニューなどを語り合い、心ゆくまで楽しい時間を堪能した。松永の妻も、この二人と年齢的にはそう離れていないだろう。しかし、松永と妻が昔を語り合ってうなずき合うことはない。なぜなのか。

一つには、妻が「趣味」すなわちスポーツやコーラス、さらには娘たちや孫たちへの愛情で満たされており、過去になど何の関心もないからであろう。彼女には、「昔はよかった」という思いはなく、今が幸せ、という一言に尽きるに違いない。では、松永や昭子はどうなのか。

昭子の 30 年と、松永の妻の 30 年は、まったく異質なものである。昭和後半の典型的な専業主婦である松永の妻は、大手企業に勤める夫の収入で、経済的には安楽に暮らしてきた。むろん、家事育児に何の手伝いもしなかったであろう松永の妻として、三人の娘を育てる苦労は並大抵のものではあるまいが、松永や昭子の苦労とは別種のものである。結果として、双方が相手に対して語り合う糸口を見出せないという現実が生み出され、夫婦に隔たりを作り、日本に不倫を蔓延させた。それぞれがたいへんな思いをして一つ家庭を運営してきながら、配偶者とはあくまで交わることができない。こんなに残念なことはないだろう。

昭子は「主婦であってこそ女」といった価値観で統一されていた時代を、独身女性として定年まで勤めあげ、働く女性としての苦労もあれば、独身で生きていく寂しさや心細さ、世間の偏見との闘い等を経て今日を生きている。松永は、仕事の面では充実した人生を送ったと言えそうだが、稼いだ金を自分で使えるわけではなし、家族に尽くしながら、その家族からは全く理解や愛情を寄せられることはなく、彼の苦労は一顧だにされない。が、昭子と松永の間には、いちいち語り合わずとも、家庭の外で激動の現代史を共に生きてきた同志としての絆が結ばれている。

二人が振り返る幸せの時とは、まだ子供でいられた時、子供として守られていた時、周囲の子供たちがみな同じ歌を歌い、同じ遊びをして意識せずとも繋がり合っていた時なのだろう。彼らはそれが年回り上、戦時下に当たってしまう。子供のころ、歌詞の内容の悲惨さに思いを及ばすこともなく歌っていたためか、昭子にも松永にも、軍歌を歌うことに心の痛みやためらいはない。そして、昭子にも松永にも、ほかに思いを共有できる相手はもはやない。それだけに、互いをかけがえのない大切な人と認識するのに時間はかからなかった。

> 三度目に会ってバーへ向う途中、例のイタチの出るという薄暗い小路で、松永は昭子の手を取った。／「なあ、川越さん」／「え？」／という昭子の顔は無邪気だった。／「いっぺん旅行にいきませんか」／(中略)イタチの出るという薄暗い小路は人の通る気配もなく、老ねた小学生の二人はしみじみと抱きしめ合って接吻した。

松永からの誘いに対して、昭子は「わたしら、もう時間がないんですものね。…行きましょうよ。嬉しいわ。二人で、どこか散歩して…火筒のひびき…なんて歌いたいわ」と答える。彼女は、自分と松永がもう決して若くはないことを実感しており、それでいながら、炉ばた焼き屋の OL たちのように、老いて恋することを恥じたり忌み嫌ったりはしない。人生の終末期が迫る彼らは、急がなくてはならないのだ。会ったばかりなのに懐かしいこの恋人と、孤独だった戦後の数十年間を取り戻すかのように昭子はためらいなく恋に踏み出す。

しかし、昭子はこの直後に急逝してしまう。松永は昭子と通ったあなぐらバーを訪ねようとするが、いくら探しても見つけることはできない。昭子との出会いや、彼女に導かれてバーに通ったことは、夢の出来事で、松永はタイムスリップでもしたのであろうか。

松永の日常は、相変わらず妻との味気ない攻防で占められている。が、彼の中には、昭子と過ごした時間、一緒に舞い戻った子供時代の余韻が残っている。松永は、昭子とのこの恋の余韻を支えに余生を生きていくのだろう。彼と妻とがいとおしみ合う時を迎えることはかなり難しいと言わざるを得まい。

５． おわりに

今、時代は平成から令和へと移り変わった。戦争の記憶が薄れつつあるのは事実と言えよう。が、長寿社会になってなおさら、戦時を今のこととして生きる人々がいることを忘れてはなるまい。豊かさに溺れる社会、家庭外に愛情を求めなければいられない時代の中にあって、何十年も前に戦争によって望む生き方を奪われた女性が、孤独な人生を強いられている。

性別役割分担が夫婦の関係を壊すなら、共稼ぎの夫婦が増えていくであろう今後は、どうなるのか。しかも現代は超長寿社会でもある。松永夫妻のようでは、人生の大半を台無しにしたまま、ただ生きながらえることになりかねない。松永と昭子を見ればわかるように、共有できる過去、共有できる記憶こそが人をつなぐ。1991 年のいわゆるバブル景気・不倫ブームの中、軍歌の一節をタイトルにした小説を発表したのは、家庭を築く機会なく戦後を生きた戦争犠牲者を思う気持ちの表れではないだろうか。

田辺の作品には、家庭を壊すような不倫小説はほとんど見られないが、婚外恋愛をごく自然なこととして受け止める意思が確認されるものが多い。それは、時代に合わせたエンターティメントとしての不倫ドラマではなく、「戦争独身女性」を悼む気持ちから発した表現ではなかったか。そして、心通わせ合える相手を見つけたら、それは婚外恋愛であろうと恋をすべきである、と呼びかける。老いを醜いもののように語る者には、軍歌を共に歌えるような、深く心の重なる恋は出来ない、と。

松永は昭子の没後、どうしても同じバーを見つけることができない。昭子は夢の中の存在で、松

永の乾いた心を潤すために現れた天女のような存在に思える。この平成のおとぎ話は、今も心の中で軍歌を歌う人があり、戦争の影響下に生きる人がいることを思い出させる。そして大切な人を大切にできる幸せを忘れてはならないと警告しているに違いない。

令和の妻と夫は、果たして恋ができるだろうか。

参考文献

[1]『一億人の昭和史７　高度経済成長の軌跡　昭和35年―39年』(毎日新聞社、一九七六年七月)
[2]総合女性史研究会編『日本女性の歴史　性・愛・家族』(角川選書、一九九二年三月)
[3]廣澤榮『黒髪と化粧の昭和史』(岩波書店、一九九三年一〇月)
[4]昼間たかし『東京バブルの正体』(マイクロマガジン社、二〇一七年五月)
[5]森正人『豊かさ幻想　戦後日本が目指したもの』(角川選書、二〇一九年三月)

※「火筒のひびき遠ざかる」よりの引用は、『よかった、会えて』(実業之日本社、1992年6月)によった。